巔

對馬、万、雲、ふかむのね同、万、　やまとしまね新古　寄歌事　ひらのたかね近古兼盛　いよのたかね伊

與、万、

〔倭名類聚抄一山谷〕巔　孫愐曰、巔山頂也、都年反、和名以太太岐

〔箋注倭名類聚抄一山石〕神武紀同訓、新撰字鏡、岌峨訓伊太々支、按顛訓伊太々岐、山巔與人顛同、故亦云伊太々岐、○中略廣韻同、按說文無巔字、古只作顛、說文、顛頂也、轉謂山頂爲顛、後人從山、以別人顛字也、

〔伊呂波字類抄伊方角〕巔イタヽキ山頂也　椒音イ雀巔　塡同

〔東雅二地與〕巔イタヽキといふは、人の頂にかたどり云ひし也、

〔倭訓栞前編三伊〕いたゞき　新撰字鏡に顛頂をよめり、至高の義成べし、巔をよむも、山頂也と注せり、倭名鈔に見ゆ、字鏡に岌峩もよめり、天武紀に蓋をもよめり、

〔類聚名物考地理十四〕山頂　やまのいたゞき

是を絶頂と云ふ、夫木抄二十日よし山嶺の小松のいたゞきにいや高からん千世のはつ春、

〔塵袋二殖物〕一山桙トハ何木ゾ

文選ノ注云、山桙ハ山頂ナリト云ヘリ、山ノイタヾキナルベシ、山巔オナジコト歟、巔ノ字ヲバ左傳ニハタフルト云ヘリ、僞巔トカキテ、イツハリテタフルヽマヲストヨメリ、字ノ下ックリニヨリテカヨヘル歟、

つかさ

〔萬葉集十秋雜歌〕里異霜者置良之、高松野、山司之色付見者、

〔萬葉集略解十下〕山の司は、野司、岸の司などいふ如く、山のことさらに高き所をいふ、

〔倭訓栞前編十六都〕つかさ　萬葉集に、山のつかさ、野づかさ、岸のつかさ、屋づかさ、市のつかさなどいふは、高き所をいふなれば、もとは積重るの義にて、そこを目當とし、本處とするより、官司